

妊娠後半期乳頭刺激の母乳確立に及ぼす影響

東京女子医大産婦人科 武田 佳彦
高知医大産婦人科 橋本 雅

目 的

母乳栄養の重要性は新生児保育における成長、感染防御においてだけでなく、母子関係の確立においても最近特に強調されており、その意味で産褥早期における母乳分泌の開始、さらに完全母乳栄養の確立が望ましいと考えられている。

今回は産褥期での母乳分泌促進を計る目的で妊娠末期の乳管開通を試み、乳管開通の母乳栄養確立に及ぼす影響について検討を行なった。

対象・方法

妊娠 37～41 週の正常満期妊婦を対象に乳管開通試験を行なった。試験前に妊婦検診を行ない、妊娠中毒症・糖尿病等の合併症例は除外した。対象妊婦には分娩監視装置を装着しセミファーラー位で 10 分間記録を行なった後、電動搾乳器を使用して片側 5 分ずつ交互にて計 20 分間の乳頭刺激を行なった。刺激中に陣痛が誘発されれば直ちに吸引操作を中止した。分娩時に在胎週数、分娩様式、生下時体重 Apgar Score 等について記載を行なった。

分娩後の母乳確立の判定は分娩 0 日より経日的に母乳分泌量を測定し、1 回哺乳が母乳でまかなえた時点を母乳確立日とした。

客観的な判定としては日齢 0 日で 10 ml, 1 日で 20 ml, 2 日で 30 ml, 3 日で 40 ml, 4 日で 50 ml, 5 日で 60 ml の母乳分泌が認められた場合を母乳確立期と判定し、同時にその時の児体重を記載した。

退院時および 1 カ月検診時には日齢・栄養方法および児体重の記載を行なった。

また乳頭刺激の母乳確立に及ぼす影響について検討するため、control 群として同時期に分娩した乳頭刺激を行っていない妊婦をとり、乳頭刺激の母乳確立に及ぼす影響について検討した。

結 果

乳頭刺激を行なった群において子宮収縮の有無について比較すると刺激群の約半数に子宮収縮が認められた。

子宮収縮が認められた群と認められなかった両群間の比較を行なうと、在胎月数では差は認められなかったが経産回数、施行日の Bishop score、乳頭刺激より分娩までの月数等では、子宮収縮(+)群において経産群の比較が高く、施行日の Bishop score が高く分娩までの日数も短かい傾向であったが、有意の差は認められなかった。

乳頭刺激より分娩までの日数は平均約 5 日であったが、刺激後 2 日以内に分娩となったものの割合は $10/18 = 56\%$ と高値であった。

乳頭刺激群、非刺激対照群間で在胎週数、初産・経産別、児体重、児性別、Apgar score を比較したが有意の差は認められなかった。

母乳確立に及ぼす乳頭刺激の影響についてみると、乳頭刺激群では母乳確立ができたものは 85.7% と対照群の 56% に比し高頻度であった。しかしながら、母乳確立日については両群間に有意の差は認められなかった。

退院時母乳栄養のみで行なっているものの割合は乳頭刺激群では 75% と対照群の 43.5% に比べ高値であり、1 カ月検診時に母乳栄養で行なっている割合も乳頭刺激群で 60% と対照群の 31.8% に比し高値であった。

また、乳頭刺激時に子宮収縮のみられた症例と子宮収縮の認められなかった症例とで比較すると子宮収縮のあった群では全例母乳確立が行なわれており、母乳確立も早く、1 カ月検診時にも母乳栄養の占める割合が 70% と高値であった。

結 論

以上より、分娩前乳頭刺激による乳管開通には副作用もみられず産褥期における母乳栄養の確立

に対し促進的に動くということが示唆されました。

表 1

分娩前乳管閉塞の母乳確立に関する調査表

【1】名前

L.M.P.: 年 月 日 ~ 日

E.D.C.: 年 月 日

Para: (- - -)

【2】乳管閉塞記録表

施行日	妊娠在胎	右		左	
		吸引時間	乳管閉塞判定	吸引時間	乳管閉塞判定
19年 月 日	週 日	分	(-・+)	分	(-・+)
19年 月 日	週 日	分	(-・+)	分	(-・+)
19年 月 日	週 日	分	(-・+)	分	(-・+)
19年 月 日	週 日	分	(-・+)	分	(-・+)
19年 月 日	週 日	分	(-・+)	分	(-・+)
19年 月 日	週 日	分	(-・+)	分	(-・+)

【3】分娩

(1) 分娩日: 19年 月 日 在胎 週 日

(2) 分娩形式: 経膈・産切・吸引・鉗子・その他 ()

(3) 分娩時診断:

(4) 新生児: 生下時体重 g, APGAR (), (), ()

【4】母乳確立記録

(1) 母乳栄養確立日: 19年 月 日 児体重 g
(日令 日)

(2) 退院時栄養法: 母乳・混合・人工 児体重 g
(日令 日)

(3) 1ヶ月横診時栄養法: 母乳・混合・人工 児体重 g
(日令 日)

高知医科大学

表 2

- (1) セミ・ファーラー位にて分娩監視装置を装着する。
- (2) 10分間CTGにて陣痛のないことを確認する。
- (3) 電動搾乳器を用い、片側5分間づつ2回、計20分間吸引を行い乳管開通をはかる。
- (4) 吸引後、乳頭を圧出し乳管開通の有無を左右別に表に記載する。

[- : 乳管開通なし
+ : 乳管開通あり

+の時には開通乳管の個数を記載する。

- (5) 陣痛がおこれば吸引を中止し判定する。
もし過強陣痛となれば Maltose 10 500ml、bricanyl 2A で陣痛抑制を企る。

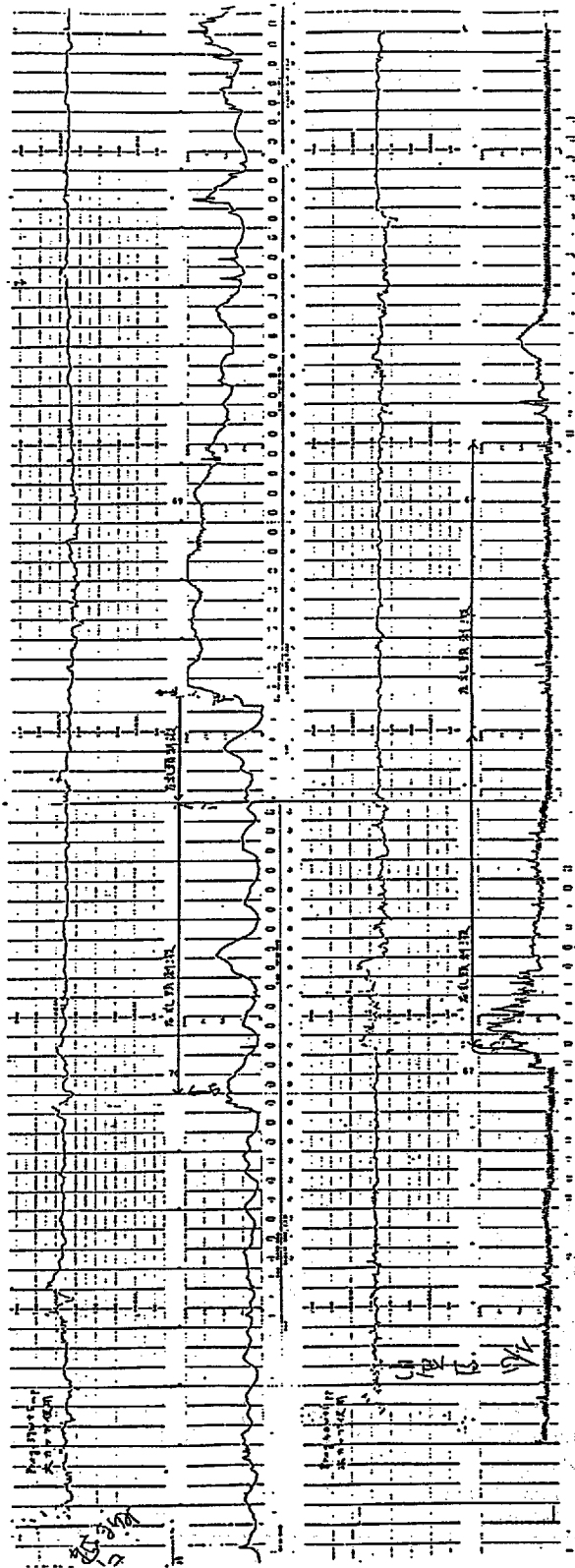
表 3

(6) 児の母乳確立判定基準

(1) 日令0日	10ml	1回哺乳が母乳(直母・搾乳)にてまかなえた時を母乳確立日として 体重と共に記載する。
1日	20ml	
2日	30ml	
3日	40ml	
4日	50ml	
5日	60ml	

表 4

	子宮収縮(-)群	子宮収縮(+)群
症例数	14	16
NST	全例 reactive	全例 reactive
施行日 在胎日数	268.2±8.1	269.4±6.0
初産婦 : 経産婦	8 : 6	6 : 10
児体重 (g)	3098±322	3193±438
Apgar Score	8.9±0.5	9.0
児性別 男 : 女	9 : 5	7 : 9
施行日 Bishop Score	4.2±3.3	5.7±1.0
乳頭刺激 →		
分娩までの日数	6.7±5.7	3.9±3.2
分娩時間 (時間)	9.0±7.8	8.0±5.5
分娩時合併症		
Fetal Distress	0	1
臍帯巻絡	2	0



☒ L

表 5

乳頭刺激より分娩までの日数

日	子宮収縮(-)群	子宮収縮(+)群
0	1	1
1	3	3
2	0	2
3	0	0
4	0	1
5	0	0
6	1	0
7	0	2
8	3	2
9	2	1
10日以上	4	4
平均	6.0	3.9

2日以内に生まれる%は、10/18=56%

表 6

	乳 頭 刺 激 群	乳 頭 非 刺 激 群
在胎日数	279.2±7.4	275±15
初産：経産	11：11	10：7
児体重	3249.3±434.7	3216.7±452.9
性別♂：♀	11：11	10：7
Apgar score	9±0	8.2±1.7

表7

母乳確立に及ぼす乳頭刺激の影響

	乳頭刺激群	対照群
母乳確立(%)	85.7%	56%
確立日	3.39±1.33日	3.2±1.8日
退院時 母乳栄養(%)	75%	43.5%
1カ月検診時 母乳栄養(%)	60%	31.8%

表8

乳頭刺激時の子宮収縮の有無と
母乳確立

	子宮収縮(-)	子宮収縮(+)
母乳確立(%)	72.7%	100%
母乳確立日	3.75±1.39日	3.1±1.29日
1カ月検診時 母乳確立(%)	40%	70%

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

目的

母乳栄養の重要性は新生児保育における成長,感染防御においてだけでなく,母児関係の確立においても最近特に強調されており,その意味で産褥早期における母乳分泌の開始,さらに完全母乳栄養の確立が望ましいと考えられている。

今回は産褥期での母乳分泌促進を計る目的で妊娠末期の乳管開通を試み,乳管開通の母乳栄養確立に及ぼす影響について検討を行なった。